平成 23 年 10 月 6 日（朝刊）の大手新聞社の記事に対する見解について

平成 23 年 10 月 5 日にご報告いたしましたように、国立がん研究センター中央病院において誤廃棄した放射線源については、10 月 4 日の晩、廃棄物処理施設（焼却施設）において捜索を行い回収してまいりました。

放射線源であるルテニウムの融点は 2310℃であり融解はしませんでしたが、基材である銀（融点は 961℃）については、焼却炉内は場所によっては 1000℃に達することもあるということであり、銀は融解し器具は原形をとどめていなかったため、融解した器具が含まれる放射線を放出する焼却物を回収いたしました。

平成 23 年 10 月 6 日（朝刊）の某大手新聞社の記事に、「医療器具は見つかっていないが、『誤って廃棄してしまい焼却した』とみて放射性物質が含まれるとみられる部分の焼却灰を回収したという。」との記載がありました。

当該記事は、回収した焼却灰に含まれる放射線物質が、当センターに由来する放射線源ではない可能性があるかのような印象を与えるものであります。

回収した焼却物のスペクトルを解析したところ、放射線物質がルテニウムであることは間違いなく、国内でルテニウムを扱っている施設は当センターのみであることから、回収した焼却物は間違いなく当センター由来の放射線源であります。

焼却炉内において当センターから廃棄されたものを焼却したと同定される焼却灰から回収した、国内で当センターしか扱っていないルテニウムを、当センター由来の医療器具ではないと判断することは不可能です。状況からの推測と 2 次所見による判断ではございますが、間違いなく誤廃棄された放射線源を回収してきたと判断いたします。それにもかかわらず、当センターから紛失した放射線源が未だ回収されておらず、どこかに放置されているかのような印象を与えるような今回の記事の内容を見ると、放射線を心配している国民の方々の不安がより一層と強まるのではないかと大変危惧しております。

当センターでは、正確な情報を多くの方にお伝えできるよう、今後も情報発信を行っていくとともに、メディアの方々にも適切に情報を伝えていただけるよう、積極的に記者会見を行うなどの取り組みをしてまいります。

平成 23 年 10 月 6 日

国立がん研究センター理事長　嘉山　孝正